



中国がわかるシリーズ13 [東]漢の衰亡

ライフネット生命株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明

2世紀に入ると、[東]漢では幼帝が相次ぎ、皇太后とその一族(外戚)の専横が目立ち始めました。成長した皇帝は宦官を頼って外戚に対抗することになります。力をつけてきた官僚(知識人)も、そこに一枚加わるようになります。外戚は母系制社会の名残で、父系制を指導原理とする儒教が広く浸透すれば、外戚の勢力は自ずと弱まっていくことになります(実態的には母系制社会であったわが国の平安時代に、外戚の藤原氏が専横を揮ったことは象徴的です)。[西]漢では、一般の役人も内廷に仕えていましたが、光武帝以降、内廷の業務は宦官に限られるようになります。この状態で、無能な皇帝もしくは幼帝が即位しますと、絶大な皇帝権力を背景に、宦官が跋扈する余地が生じます。166年には党錮の獄と呼ばれる政変が起こり、多くの官僚(宦官に対して清流派と自称)が排斥されました。この年、マルクス帝の使節と自称する者(インド商人?)が、ベトナムを経由して中国を訪れています。[東]漢の西域支配は終わっていましたが、海路は間違いなくローマまで通じていたのです。メコンデルタからは、マルクス帝の貨幣が、洛陽郊外からは、ローマングラスが出土しています。もっとも、活発な交易は、金(地金)の流出を招き、中国国内のマナーサプライを低下させました。この結果、商業が衰退し、富者は土地を購入して、大地主(貴族)化していったのです。

2世紀の後半頃から、中国の気候は寒冷期に入っていきます。この寒冷期は、約400年続くこととなります。農業生産に多くを頼っていた古代社会では、気候の寒冷化は、生産力の低下を意味し、強大な統一国家の維持が難しくなります。また、寒冷化の影響をより強く受ける北方の遊牧民が南下を始めます。こうして、3国時代が幕を開け、中国は長い分裂の400年を迎えることになるのです。この時代に、相次ぐ天災や飢饉(災害年の割合は、[西]漢15%、[東]漢61%という試算もあります)によってもたらされた社会不安の高まりとともに、西国から持ち込まれた仏教にも刺激されて、老荘思想を中核にした新興宗教(道教)が起こります。張角の太平道や張陵が四川で起こした五斗米道が有名です(張陵の孫、張魯は、漢中で30年近く宗教王国を維持した後、曹操に投降しました。その子孫は、江西省龍虎山を本拠とする道教のプリンス、天師として、孔子の子孫同様に尊ばれ、今なお現存しています。孔家が82代、張家が64代、おそらく世界最古の万世一系の家柄でしょう)。自然災害が多発する時代にあっては、死後の永遠の生命より、目前の現世のご利益の方が切実でした。罪の懺悔と呪術によって心身の病を癒す道教が、広く浸透したの



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

は、このような時代の要請にマッチしていたためであると考えられます(葬礼も厚葬から薄葬へと変化しました)。**[東]**漢の 11 代、桓帝は、165 年、1 年間に 3 回も老子を祀って長生を祈願しましたが、この時代の風潮をよく表していると思います。

184 年、張角が、黄巾の乱を起こしました(蜂起者は黄色い布で頭を包みました。五行思想によると、「漢の赤」の次の王朝のシンボルカラーは黄色ということになります)。黄巾の乱は 1 年足らずで鎮圧されましたが(在地の豪族である曹操や孫堅も活躍しました)、**[東]**漢の屋台骨は大きくぐらつき、反乱が相次ぐようになりました。189 年、外戚の何進が宦官の撲滅を図って逆に殺され、その直後、名族の袁紹が都に入って宦官を一掃しました。この権力の空白時期に、洛陽に入った董卓が、**[東]**漢最後の皇帝、14 代、献帝を擁立し、群雄割拠の先駆けを果たしたのです。董卓は、190 年、本拠地に近い長安遷都を強行しましたが、部下の猛将、呂布に殺されてしまいます。わが国でも人口に膾炙している三国志の時代が幕を開けようとしています。

この頃、倭国では、争乱が続いた末に卑弥呼が共立され、王位につきました。192 年には、ベトナム中部に、チャム族がヒンドゥー文化を受容したチャンパ(林邑、宋以降は占城と表記)王国を建国しました。一般に、東南アジアでは(古くから中国と関係が深い北ベトナムを除いて)インド文明の影響がより強く見られます。膨大な漢籍の理解を前提とした中国文明より、インド文明の方がより受容し易かったということではないでしょうか。